敲氷茶話 龍孫戛玉

二

208
699

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

自序

夫人之情不能不

慕物矣初主慕父

母弱之慕少艾性

之慕妻子強之慕

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

君蓋所以慕之物
異而其所以慕之情
一也慕父母孝之
端也慕妻子義之
端也慕君忠之端
也戀慕之言何必色
慾云矣唯弱之
慕少艾人情之所
不能無而邪正自異
生矣有為愛情而

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

況者而觀過知仁矣
至為色慾而溺者
要得免桑中之刺
也余著龍孫憂玉寶
欲使童蒙知其邪
正之岐路矣狂蒙
唐之言何得方益
於讀焉為之贈賢
序已云爾
文化五年戊辰季

国立国会図書館　龍孫憂玉 2巻　208-699
ガラス使用

春秋礫水寫居

神屋蓮洲誌

一侍多竹多右衛門

多多純竹のよれとり冊ゝ山みと
さわさわとしき爭しをあこ居

巻之上

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

凡例

一此書只童蒙ノ観覧ニ便ニス故文中言語等ノ如キ時代ト相亘ラザル者有只其意味ヲ要トス

一画ク所ノ人物ノ如キ亦一ニ方今ノ俗ニ従フ其餘器械ノ如キモ亦然リ只童蒙ノ観易カランガ為ニ設ルノミ

一用ユル所ノ字ノ如キ雅俗相混ズ且字傍音声ノ假名等ハ四声ヲ別ツニ暇アラズ只呼ブ處ニ依テ記ス必ズ翻語スル者多カラン観ル者諸ヲ恕セヨ

蓬洲識

行如淚出江西一

陣清風淇奥春

七

敵水奈諸

龍孫戛玉巻之一

蓬洲著作並画

緣故

嘉世向冨久茂濃有喜娜美多門登身天津利勢奴佐幾仁船人屋歸類良武茲仁駿河の国三保の浦なる如月の暮りゝこ此邊に徘徊せし八九人の壯者あり盃何も大家の士と見もるゞ寛不畏〳〵

出立とる中に唯一人の美少年は其身温柔にして
心もとのびらら優七〜〜く見ゐるゞ所の古々り物此
人のいへらく偶君こちゝ隨く此所に逍遥すれば
殊更奥もふる〜来きる家路さへ打忘る心地ゝ
あもーろうはさふらくど各御覧候海の々〜きも
常よりハ闇くなりて吹来る風も冷まじきに何成
変にうんもをりゞとう候へバそやく帰路に赴き
給るんやなを我ゞ毋ハことゞく雷を忌嫌候へば

若春雷の声を発せんことをのゝ〜ばさらりまゝこ
我を思ふ〜毋も若労〜ぐるべし〜るゞハくハ
変なきうちにとく〜うへりきまひてんやと打
ゐはきくいへりゝきハ中に針ゝさ増りさる男の
あくまぐいゞめ〜きゞこゝへ〜いゝ〜〜さて〜
御身帯刀の手まへもをぢず比奥なる土ゝる海
くらく風烈〜さとくいゝなる変事ゝさふらふ
べゝよ〜迅雷の鳴出く此傍に落ゝらバ速に

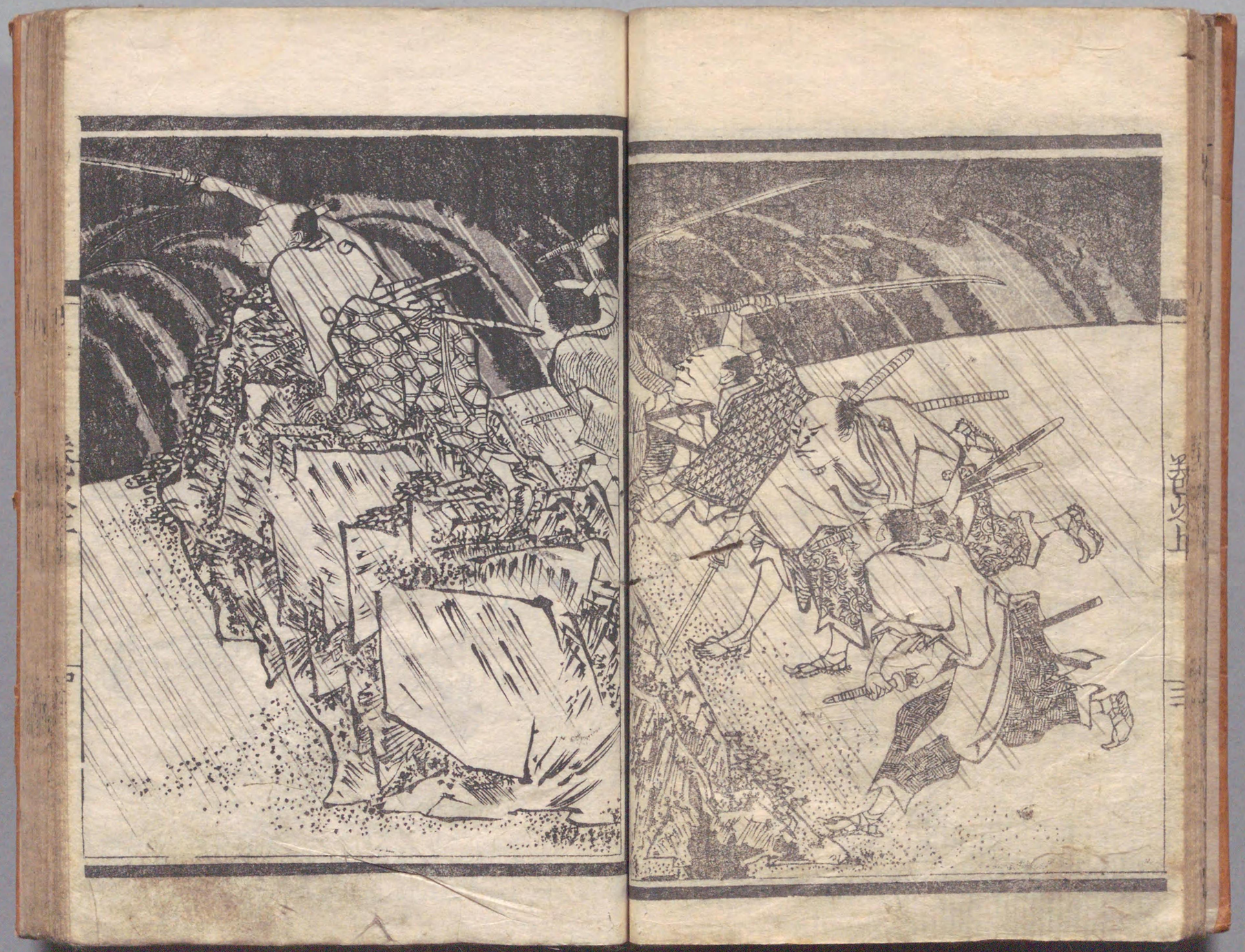
国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

手捕にすべし。癇癪病なる老母の為にうくる場を
通きゆハ〻いづくにても物の用に立ざるころ
面し。今ハ〻このところに休ひくいろなる
変事をも見究えゼあて八人ゲ〻ゝう膽魂を
すえゆへといとも悪げに嘲きバ皆一同に
さもこそと笑ひつ〻斯くおもふくうつ
波の立ろへるをバ厭ふ為のくるまで
眺望あきと各岩端に腰うちかけ勢気色も

見えざきバとかくもいとゞせんろこと无さも
多勢に無勢なきバふるく心中に怒りを
隠し〻黙然とし〻く立る所に立る岩の
上を見きバ忽ちなりの小蛇出ぐく鑓
首をもたげつ〻尾先にく彼の嵩石を
打擲けバ黒さ烟四方より起りく
次第に小蛇を纏へるこのりさま
何とをく物冷けきバいづきも

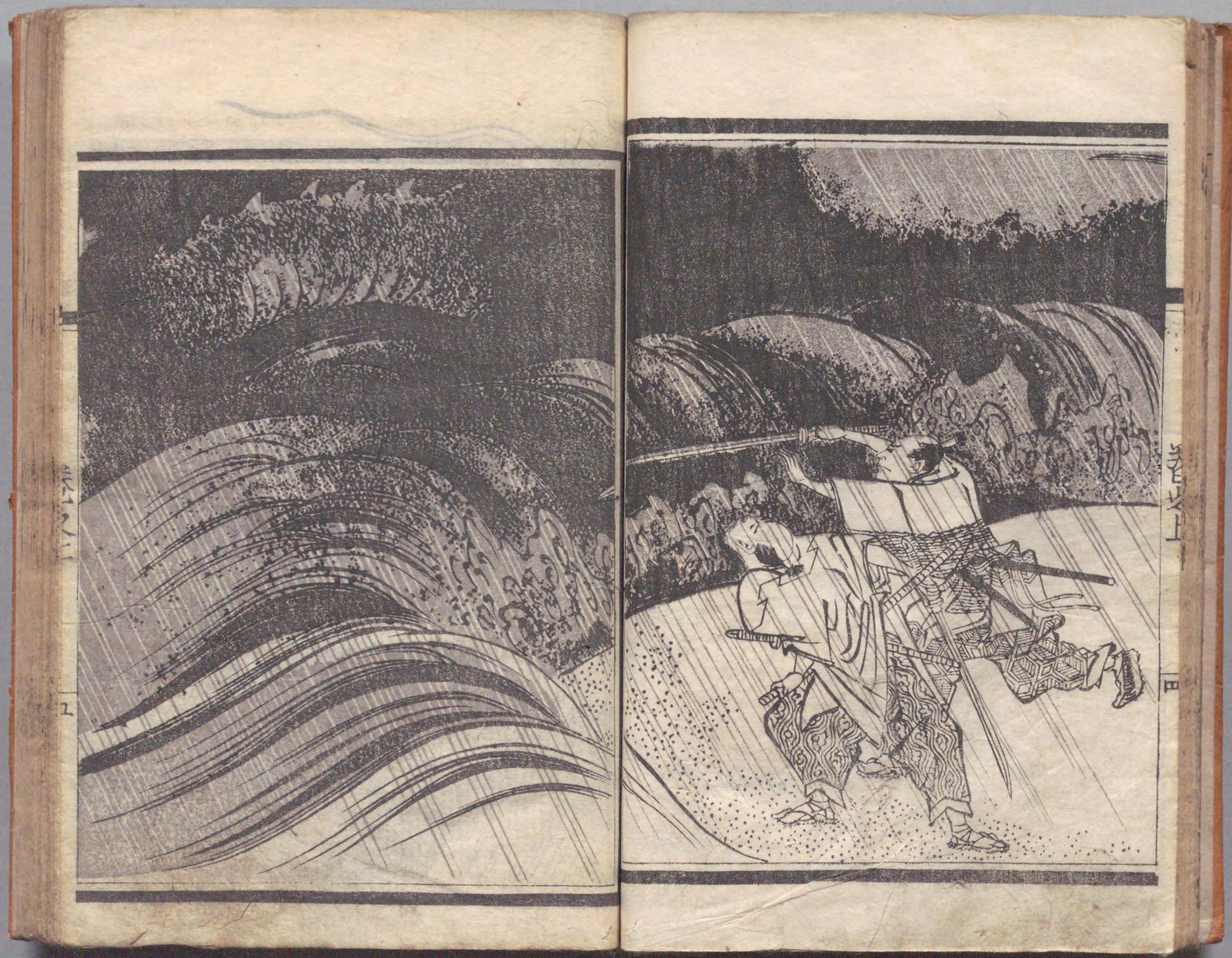
国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用



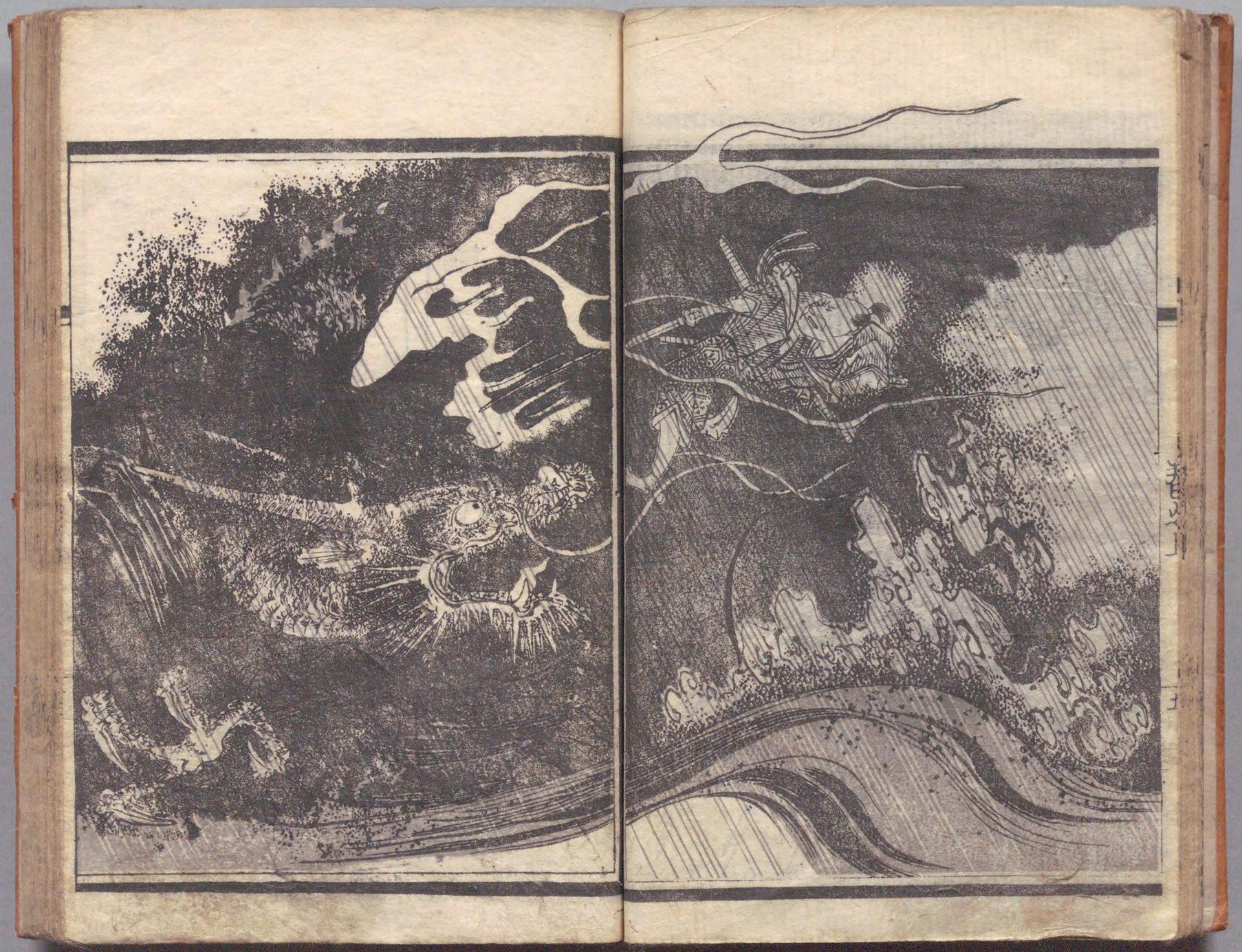
国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用



国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用



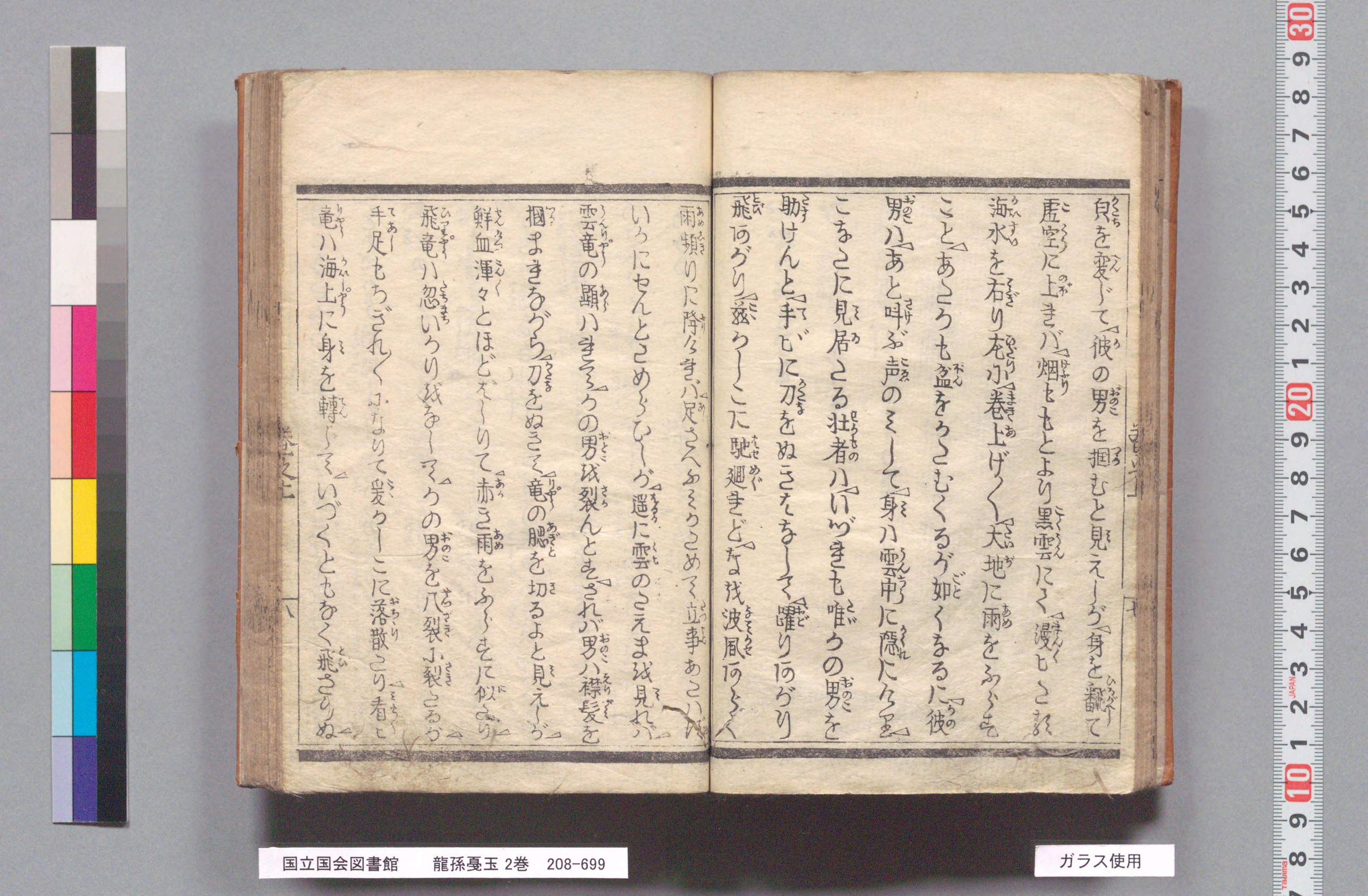
国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

奇異のおもひを
為し眼目もふくぶを
見居るゞ中にとゝろ
増まる男ハ獨りと走り出くゞんの
小蛇をとゝへんと黒畑を分つゝ行やゞて
岩角に手をさゝのゞ小蛇の尾先を握ると
ひとゝゝ須臾に小蛇ゝ三丈ばかりの雲龍と

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用



負を変じて彼の男を掴むと見えしが身を翻て
虚空に上きハ烟もとより黒雲にく漫もさま
海水を右り左小巻上げく大地に雨をふらす
ことあらも盆をうつむくるが如くなるに彼
男ハあと呼ぶ声のそこて身ハ雲中に隠れ
こるとに見居とる壮者ハいづきも唯うの男を
助けんと手ぐに刀をぬきたをしく躍りかゝり
飛かゝりこに馳廻きどなる浅波風かゝく

雨頻りに降々きハ足さへふくらめて立事あたハ
いらにせんとめらひしがゞ遥に雲のさえま浅見れハ
雲竜の顕ハきたうの男浅裂んとされハ男ハ襟髪を
掴まきあがら刀をぬきて竜の腮を切るよと見えしが
鮮血渾々とほどばしりて赤き雨をふらすに似たり
飛竜ハ忽いろり浅あしてうの男を八裂小裂とるが
手足もちぎれく小なりて髪うこに落散こり看と
竜ハ海上に身を轉じていづくともなく飛さりぬ

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

物こゝろある壮者共を不思議にも五体すくゝく
をのゝく阿絶しゐるハ尺ゐの美少年一人のみ顔色
平生のごとくゐして悠然と立居ゐとゐく〳〵て
雨も晴ぬ波静かに風収まり日も西山にゐゝぶく比
ひとり傍なる砂上を見ぬバ五色の光りゐゝゐゐゐ
一の宝珠ぬ〳〵顕ハきゐゐりこハいかゐるものゐやと考に
つゐへゐく竜の腮にさ〳〵も五色の光りさハ各玉ハ
あゐるゐ〳〵さ知に雲中にくゐの男の竜の腮を切り

とりけきバをゐくずも此珠ハ数々ゐるなめり是ハ
世にゐる珊瑚ゐきバとくとりて日ゐ家にゐへゐ
国のこゐゐとゐさバやと已にとゐんと立ゐり〳〵ゐ
又おもひ廻らすハもとより人ヒふともゐハきて此
所に来きバゐきゐる珊瑚を見ることを得ゐる也
必〳〵も日きひとり耳得べゐふあゐゐきバ先人とも
知せんとゐゐこゐを見廻ゐセバ皆正体ゐく餓
卧せるを〳〵いかゐるもへぬと心中に打驚ゐ或ハ名を

呼び或ハ切り起〳〵走りありけど藥ごに用意
おろきバ手を掬〳〵潮を汲ゑ一人毎に面に灑ぎ
次第に夜の明るゞごとく皆目をひらきて起出さり
美少年ハ大によろこび大ヒを介保〳〵て怒ヒの由と
うゝきバ皆彼の珠をゆゝひ寄りて我先に取んとす
中に一人の士ゞ云ふ斯く競ひて取んとせゞ若珠に
瑕つくことも有るべし先静まりて我ゞ言葉に随
おゝとても一人の宝とすとも湯ゝらず さりとて雙
無き宝珠をバ各と分ちとてんすもおし唯我等ゞ
主君元来珠器を好ゝあふを幸に此名珠を奉て
我〳〵おだくの恩賞にゆづゝんかきゝらゞ皆く
同心〳〵あふや否と敵バ一人ゞ答へていなくゝらこれ
比類なき珠宝も我〳〵ゞ奉つゝバいろで若干の金銀をバ
賜ハるゞもさ〳〵ゝのゝバよゝき價をもとめて他に賣ゞ
まゝ〳〵めゝまゝ〳〵我君にえ此よゝ物語りゞゝ
んゝきまゝゝるゝと云へバ又答へて云ふゝとや我くゞ

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

申す事を聞入きあハぬ君あらん此各珠をこゝろ
捧げあハ速に千々の黄金を各とりこんてと掌を
うへさよりもいと心易うるべし必疑ひあるゝと事も
無げに演説すきバ実にさることもさふらふべしと
皆一同に得心してやがて宝珠をとり得つゝこの此
徒ら何事をか耳うちしたん中に一人がうるづきて
美少年にいひくるを今日図らずも此所に逍遥して
御身も共に見あふてく折ふし竜の天上するを

會るゝ先に彼の男のくごとんの竜を生捕んと勇を
ふるひて雲中に戦ひし小彼の男ハ不運にして竜の
為に害せらるるきバ我く渠ら敵を討んと竜を目
づけて向ふきども竜を虚空に飛び去ゝ何如共
せんすべなく手を空しうして帰るといへども斯く
不思議なる宝珠を得てく正しく竜と戦ひしこと
人ヒのいさをしもあふハるきバをのづゝ館に
行ても御前に於て莫大の恩賞小きなれこの

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

可々きど御身ひとりハ唯波風のあらさるのゝ
懼恐きゝ目前に傍輩の死するをゝに貪着せゞ
土偶人にもおとらゝる振舞ハ何まりになさけ知
御心にてさむらふきさきバ館ゝ同道セバ嘸面
目を失ひハん気毒さよ御身のごとき臆病武
士ゝ人に好うきぬものゝろハと唯遠慮もなく
恥しむきバ今ハこゝもさまりうゝさふバ臆病
武士の刀の手のうち御こめ下さきよと左左に

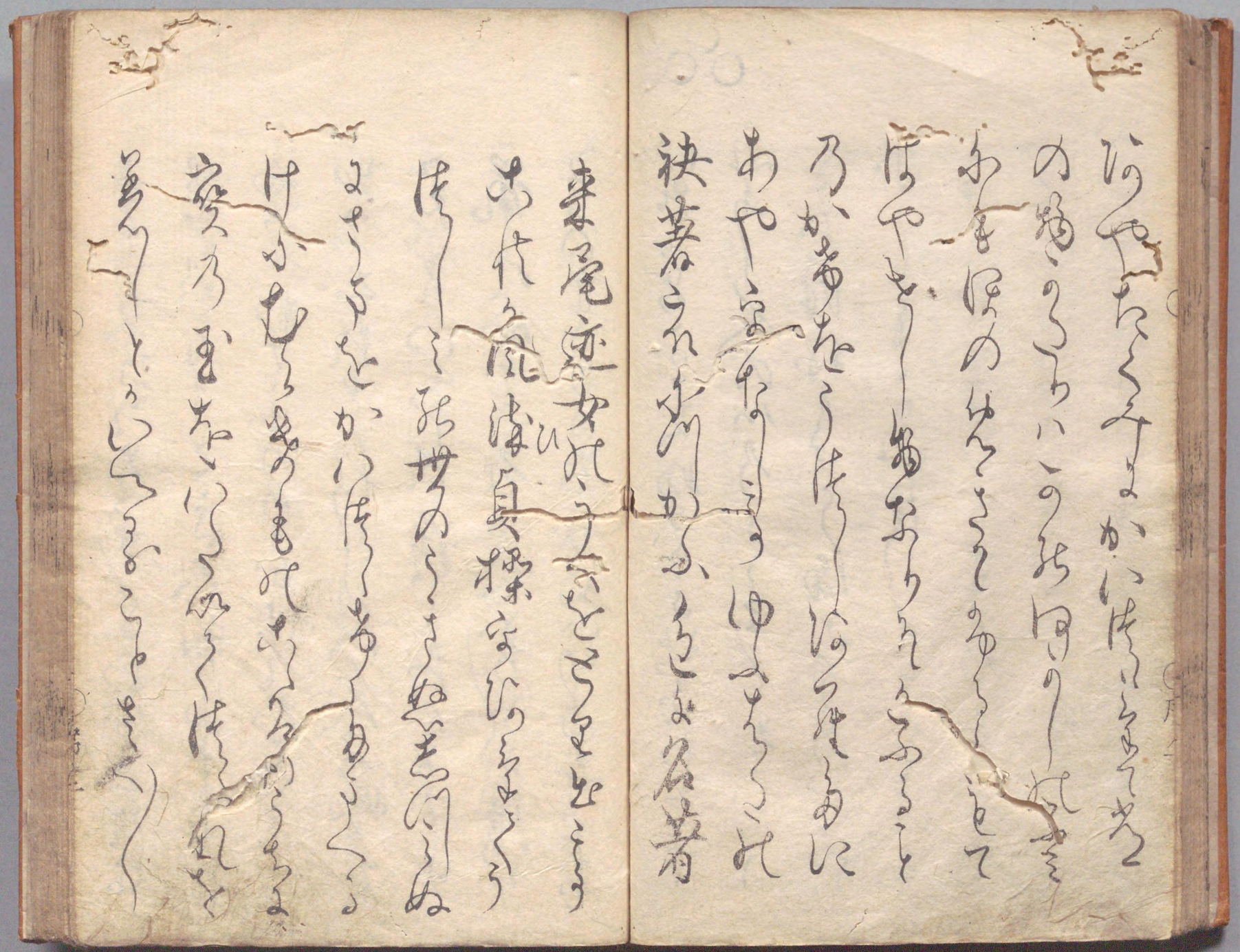
心を配りてやゞて刀の鍔元をくつろげぬきバ壮者
共ゝ志すゝしとりとうゝづきたのひゝくバ手柄ゝ
勝負ゝきと皆ゝ向ふに結ゝくるを心得こりと抜
えゝて真中に突て入きバすハ気違よと一同に
跡をも見ずして逃出をこハ言葉にも似ぬ臆
病さよゝへゝゝと追ゝけゝくゝや暮えて霄闇の
人の往来もヒゝとぬに向ふを見きバおひゝゝゝく
挑灯をきふめゝて此人ぐの迎ひと覚ばゝく

このまこの僕共馳来りきハ壮者どもハ夫と見るより
僕等に命じてあの少年を搦え上と下知すきバ中に
少年の召使へる僕共ハいろゐる故ぞと驚天して尋を
壮者答て狂気ゐるハと呼ハるに我〻ハ我等ぐ
耻鎮め候ハんと主人を推隅て、止むきバさみ止ろと
左右に蹴散〻荒たにのきて大勢を追ひろくきど
彼の者共ハ何地行〻んさ〻に見えざりゐり
ゐる所に彼等ぐ僕共前後より切てゐきバもの残る

云ハぞゐるとこゐとに切即セく常貺天走りに走る処ホ
えゐ〻ずも以前の壮者横あひより突て出美少年ぐ
ゐざ〻ゐる刀をえゐと打落セバ各茲におりゐさゐりて
終に少年を搦めホ〻り斯て僕等に少年を警固させ
急いで参きと皆くハ館をさ〻て立ゐへる
○評ホ云く小蛇の出て雲竜と化〻ゐるゐ必壮士
少年の為に此所ホ顕ハるくにゐ〻ぞ元来竜の身を
自在に変ずる事或ハ小奥とお星或ハ小蛇ど成て

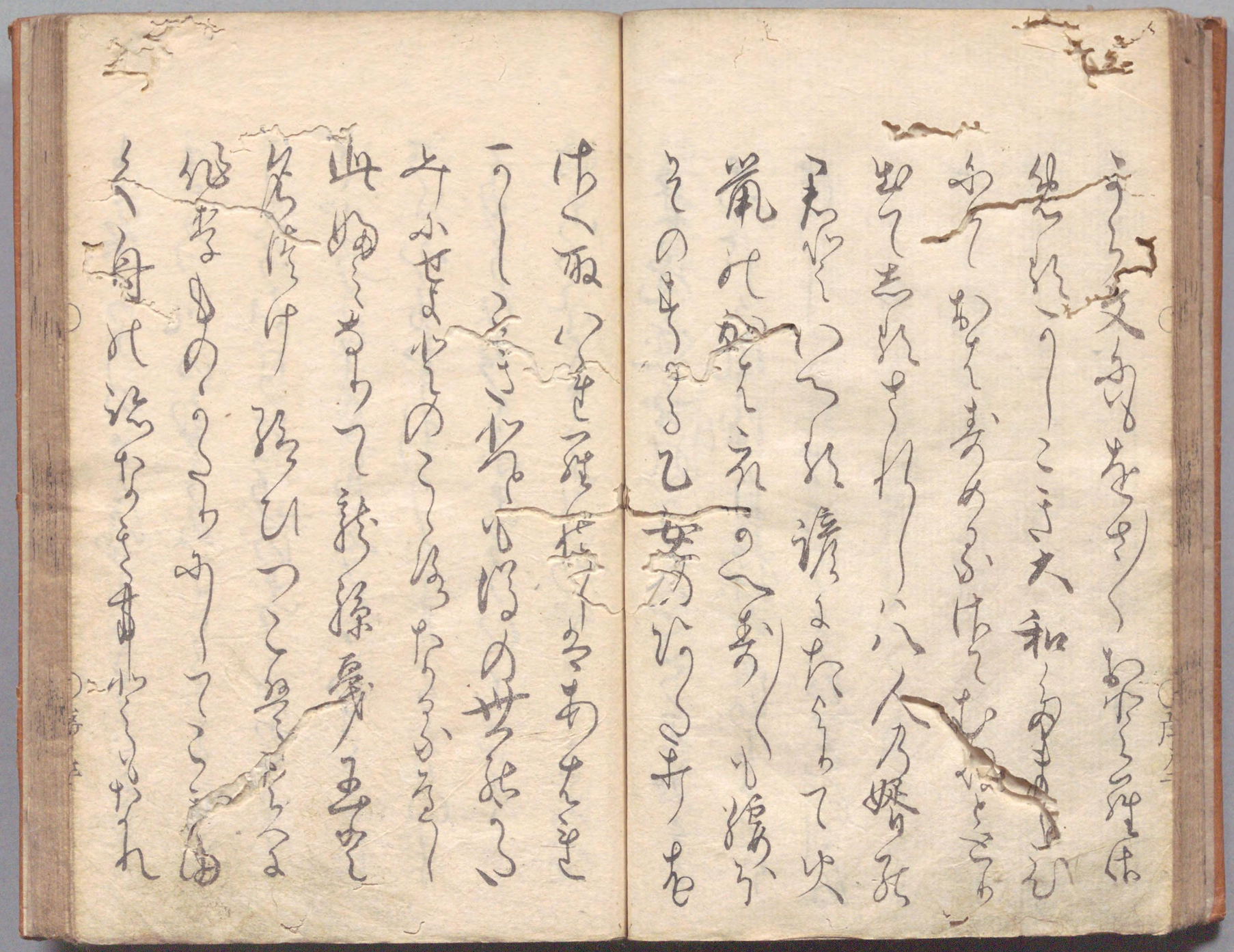
国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

山海に潜めるゞ此折〳〵も天に上まるの幾めぐり
怨雲をまゝき雨をよびてらくのごとく木体をあらはす
あるべし只山中にも海辺にも偶是を看る人あるべし
大に身に福を得るよしなど普く世に云習はすべ
ゝる例也又亂て信用さゞることにゝざるも然に彼の
曲者過てくごんの小蛇を捕へんとせし故に災を其身に
及ぶし将後の奇説を引出しゝる端とおもはまゝ此
事を巻のたゞめ小挙る小ゝ牧のめき　巻之一終



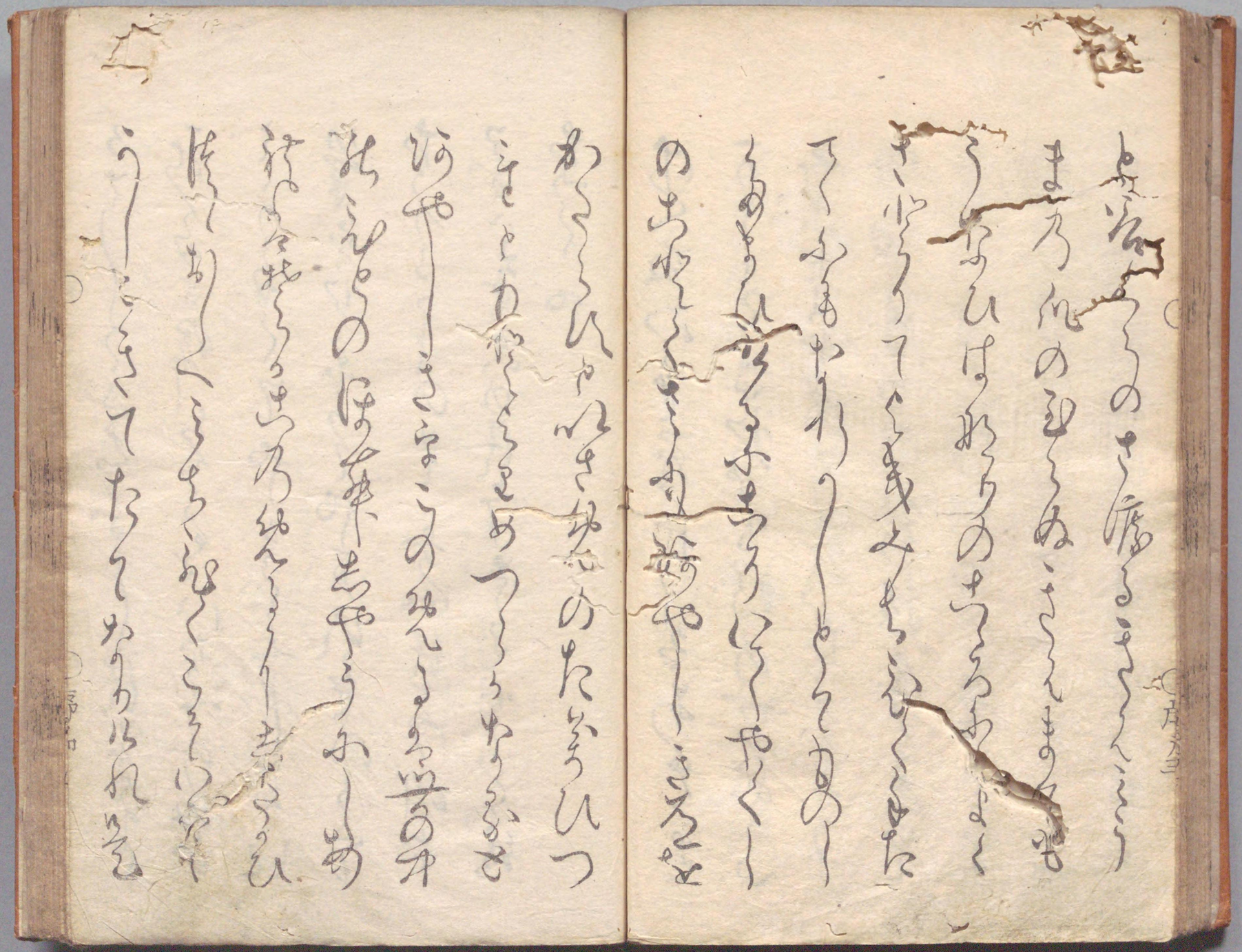
国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用



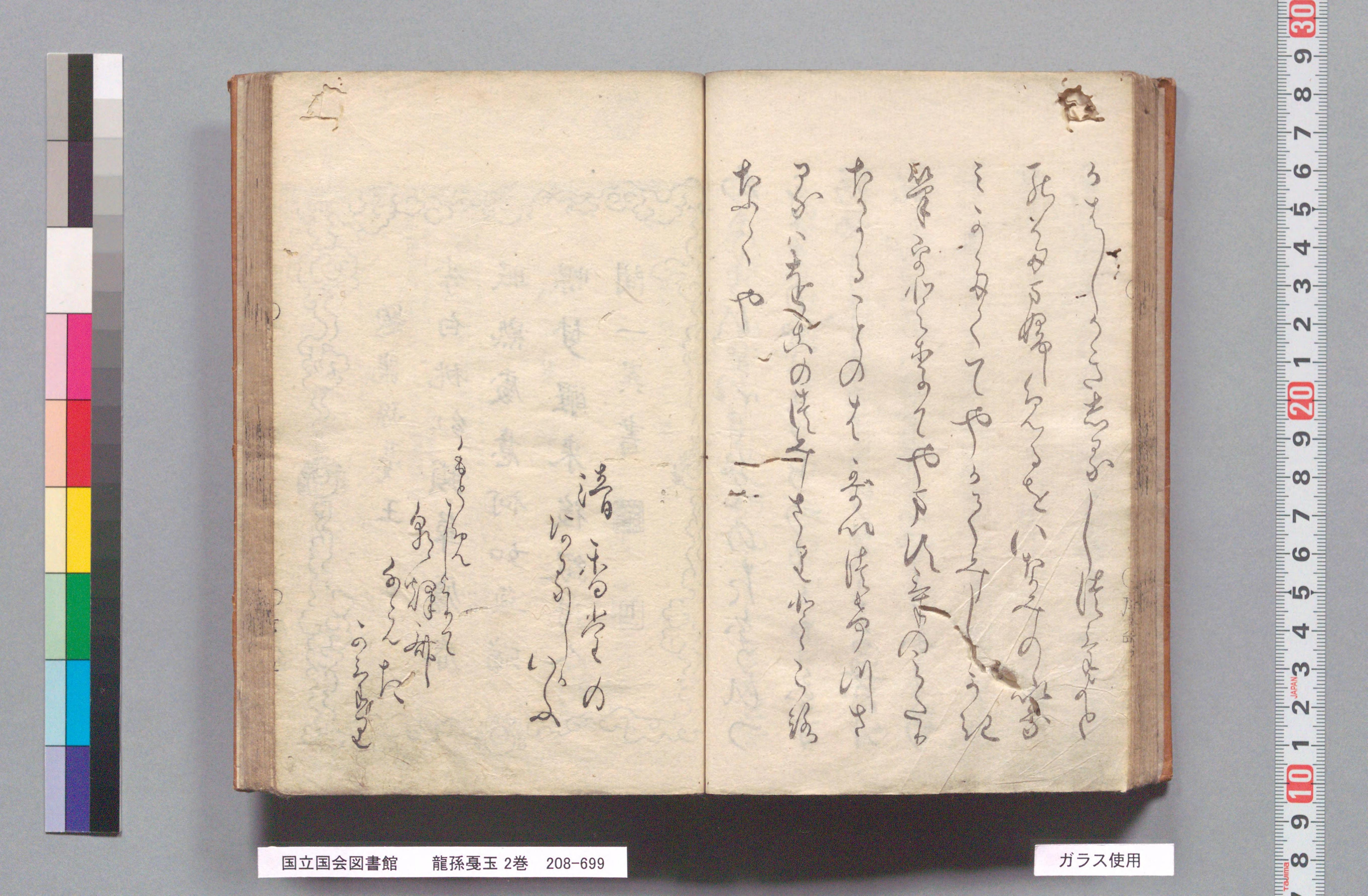
国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用



国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用



国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

題龍孫蔓玉

李白桃紅鎖草廬春
眠熟處意何如無端
蝶梦醒来後綴得人
間一異書

書

蓬洲著作並画

色字第一節

大行之路能摧車若比人心更途也巫峽之水能覆舟若比人心更安流也と実に世の中を渡くらべて今ぞ知る人の心の外に又何をか穏ろなふすとやうなる面て悪の善を害し善の悪を

国立国会図書館　龍孫蔓玉 2巻　208-699

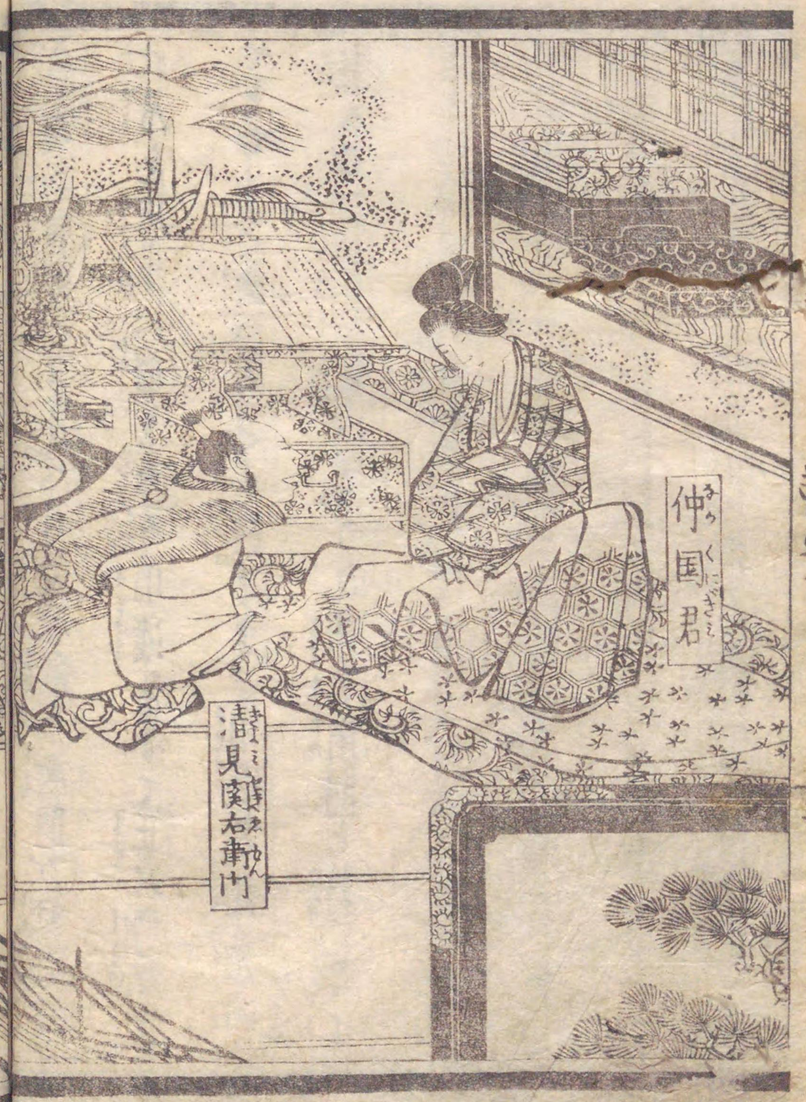
ガラス使用

亡すも唯此大千世界中普く五蘊の造化なり
今まむかし人皇八十八代後深草院の御宇當て
建長中の事なり宗尊親王始而將軍宣下ある頃
駿州賤機山の上を領せし市山左衛門高国の
息子同勅負仲国と云人ありけり幼なうして
母君におくきのふに敢さくまに盛長ゆくが
和漢の道の博士にめされてそれくの学びにも
そこなはれひまひ月雪巻の折にふれくて

待歌管絃の催しあるに勧のあるて父君の寵愛
ゆのづから浅からざりけるに斯て盛長のつこう
余多さむらひ侍女どもの多きに小渡といふ女乃
仲國君の寝所に通夜ありていつの程にか身さへ重くな
成りにければ小渡窃に以為今ハ氏よし大君にも
打明し永く此君の妾とせるべしとおもひ
あぐりて女とゝびハ歓びしゝがさすがに君よりも
年ちさのまさりこゝきバ何とゝく世の嘲りをや

耻らうたん中くに朝夕の物思ひも絶ざりれば
まづ君に先と告奉るに君ハ唯父君の知ら
ぬ〻ぞうしさことなるべしとひとすら此事の
案じ煩ひ思ひ〻時ハ此君の近寄て清見
関右衛門と云者ほの其性大膽不敵にして
七とより表裏の士なるゞ慕て小渡と密通して
已に同穴のちぎりを深ちりしかバ小渡ハさしも
懐胎に及べるあり〻黙るを當家ハ不義の咎め死小
至るべき恒例なれバ〻に関右衛門ゞ奸計にて
此君を陥申に陥を奉り小渡を下て正に御胤を
やどせりと云ひなさしむ〻さきど小渡ハ此君乃
艶なるに心を奪ハれもと関右衛門と計し故も
をのづから〻うハの其〻ふにぎりたるに此方へ
世の嘲をも耻らひて人ちゝず朝夕の物思ひをバ
仕侍るあり〻切君ハ此事を夢にだに知りぬハ
唯身ひとつを引うけて誰と共に商議べきと

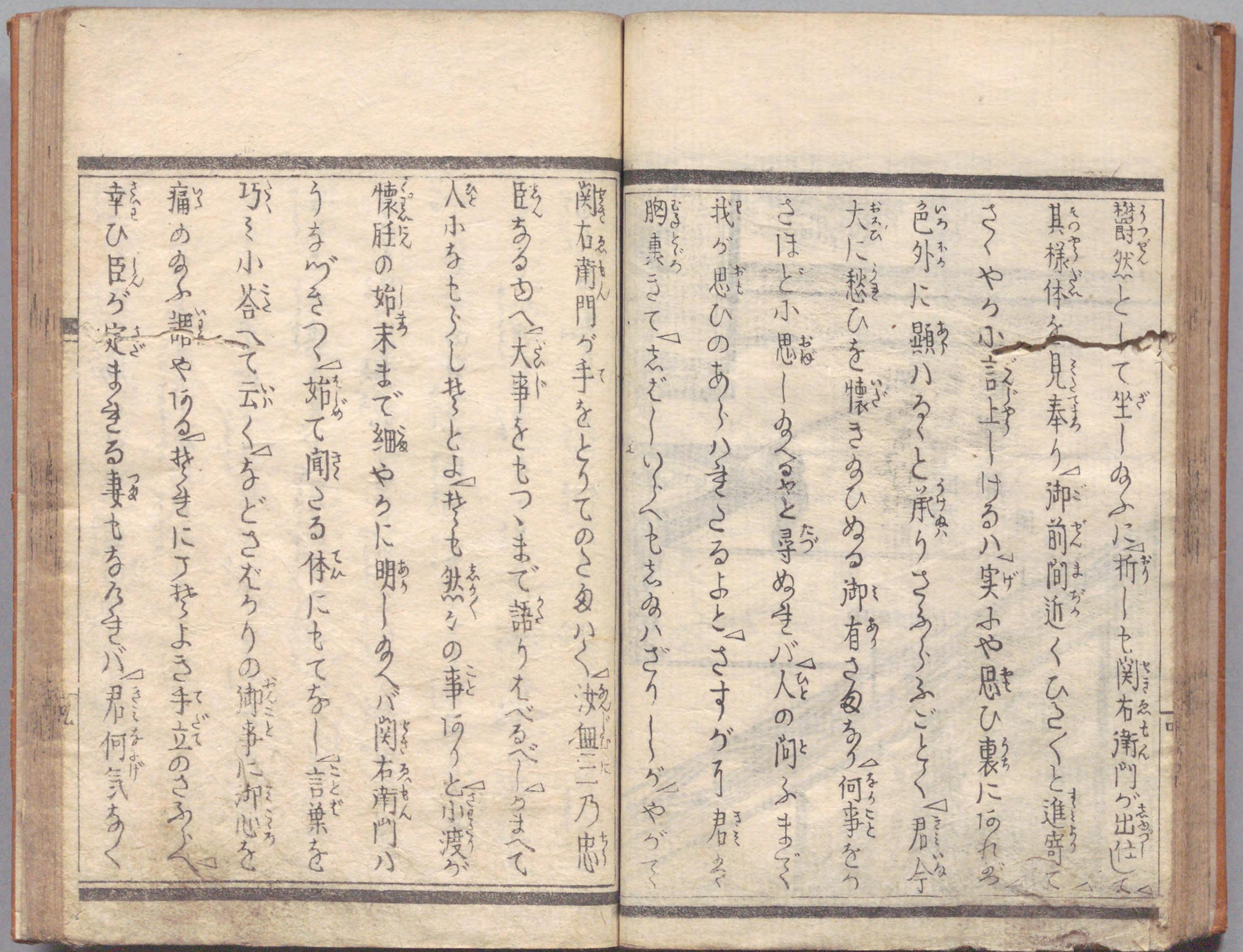
関右衛門好討
俤て仲国君の
髑髏を解く
圖



国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用



欝然として坐しぬふに折しも関右衛門が出仕して
其様体を見奉り御前間近くひさくと進寄て
さくやう小言上しけるハ実よや思ひ裏にたれぞ
色外に顕ハるゝと厳りさゝふごとく君今
大に愁ひを懐きぬひめる御有さまあり何事をか
さほど小思しぬくるやと尋ぬきバ人の間ふまでく
我が思ひのあゝハきこるよとさすがり君
胸裏さてゝさゞしいゝくもぬハざりしゞやがて
関右衛門が手をとりてのさまいく決無二乃忠
臣あるまへ大事をもつゝまで語りたべるべしゝまへて
人ふなもらしぬくとよゝぬくも然々の事ゆゑと小渡が
懐肝の始末まで細やかに明しぬくバ関右衛門ハ
うなづきつゝ始て聞こる体にもてなしゝ言葉を
巧ゝ小答へて云くなどさだゝりの御事に御心を
痛めぬふ語やゆるぬきにてぬきよき手立のさふく
幸ひ臣が定まきる妻もなるきバ君何気なく

小渡を臣に賜とさよし殿の御前へ御願ひあるほどあらば此事速に成就すべし臣が小渡を妻とせしうへあらば十分に介抱して君の御寵を安と産落さすべし是両全の謀にハさらハずやと

ちさり顔に演説すきハ君も始て愁眉をひらき今にもゞめ波が忠節賞しても猶あまりあるとさしも小渡を妻とし呉なハ波ハ実に我が為の恩人なるを自然何にても望ならハ必ず

意に任すべきぞと歓ひのあまハ忠すまじきうと心の中大に安堵し さらハ鄙の若君ふてもまた姫君ふてもあれ誕生ごにましまさば往々是に分地をさぶべき結構ありをとなくのもあく申ばきハ寅心易ろるべし まづ小渡をもこの由を云含めて父君にも夫とあく願ひ出とく婚姻を調ふべしと堅く契約をなしが其のち小渡を関右衛門が方に嫁せしめ程なく男子

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

誕生して名を礒松と呼ぶ。物しをやうを
光陰のやがて三年を過ぬるまくに仲国公ハえや
十八歳と聞へのくどいまござるべき配君もまし
まさるバ父君もなほ此事を思しあつてせめてハ
閨の伽にもの学ばしとひさすらによき女をさづる
のくりしゑ茲に普代の老臣あり秋野稲田左エ門とて
身の行ひ一つとして道に欠る事なく智勇兼備の
士なるゑ両人の子をもちて兄を千種丸助妹を

瀧萩とおん名つけてゑ。いづれも容顔美麗にそ
なを孝心ふかき者共なれバ父母の慈愛も殊
更にまさりつゝ庭の訓もさまゑゝ小皆親しくそ
見えける。瀧萩ハ今年已に十五歳と成こ
ろきどいゑゑ御舘にもつゝふまろゑで斯く父母の
もとにやしなハれしを兼而美人の名にとてきバ
高国公と御覧ぜゑきゑゑ稲田左エ門に
命ドて或時ゑゑちに召ゑるゑ。さしも嬋娟ゑる

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

容貌世に類あるべきぞりくきバ直に稲田左衛門へ
所望あるて仲國公の聞の御に参らせられ
こゝろより濱萩の者を其侭に萩の方とぞ呼ぶに
くくらくて又一年を過ぬるに高國公ハ妻女ありて
仲國公を主とあるゝ夜ア狩萩の方も懐胎ゆりが程ゑ若君
誕生ゆりて小雪丸と是を名づけ奉ぬ太程小君を始め館ハ
よろこび大らとあるゝず皆萬歳を祝唱に成る時に
稲田左衛門ハ氏吉相を聞よりも猶醫ヒとして

樂しまず或時子息千種之助を密にまゝきて語り
ける八ろも先君の御所望にて一年先に濱萩を
くゝちに呂さヒのふより濱をバすぐに仲國公の
妾にとのゝへバゝる事ハゝるゝてより我が心にもゝ
ざきど君ゞ龍命もゞゝらく其御心ゝまゝ
奉りしゝバゝれかさるゞゝ氏ゝくて玉の輿ゝ誤に
違あくほゝと小錦衾の上に坐しゝ也ふべに純帳の
中に入りて辱なき君寵のいやまし小増りもけゞ

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

我もことさらに歓ぶべき處あきども中に愁のみと
なきるをなべて世人のあぶひとて人のよきをバおとめ
そるむものあるにまして主君の御胤をやどり彼の
若君をまうけ奉きバ誰ハ是を羨やゆさん又
何よりも気遣ハしきハ清見関右工門が内心あり
渠元来小渡と密に通じて年月を重ぬるまくり
事の已に顕ハるべき謂きあきバ一さび主君を欺て
罪を脊ハせ奉り渠等が不義の悪名を遁ること

我又ひそかに是を知まり剃へ一人の男子を設て
是をバ君が御胤ともいつハりけん君彼の小児を
外ゝず慈て朝夕御前を離ゝ小渡と
共に御館に召寄置るゝ事いぶかしきの第一なり
其上君が御使に八関右工門を始として衣川厳平
浦松甲斐冨士川流太郎なんどいへる侯人輩のく
集りて常に酒色を勧め奉きバ悪しき道に八入り
やすくいつとなく君も惰弱に成り行おゝを背

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

よきことに心得ていよ〳〵おせゐり諂ふ始末ハ定て
ふるさ妬謀ほゝんとひとり心を痛むきバ折を伺ひ
再三諫め奉りしゝど君ハ唯嶽の方の故をもて我が
辟とる心より さこそハ渠ゝを遠ざけんとゝひよと
あゝれぬ御気色に腹ふくらーのゝくバ強て言出んに
言葉あく倩思ひ廻らせーハ迚も濱荻を館に置てハ
我ゞ諫言の妨あるべーよし 深閨に忍び入りて渠を
我ゞ手に討果さんと心中に覚悟せーゞ已に其頃

懐胆の沈決閉もきバさみろゝ脈内にやどりあふ君を
紂ー奉るに忍びずーて 宵エーく月日を過せー處に
今や若君誕生なれバ彼の関右工門夫婦の者ども
いゝでゝこゝろよゝるべきさきバ比後小雪丸の御身の
上に災ほゝんも計りゞゝく渠ゝハ猶も我と親子を
怨敵のごとく思嫌ハん事必定せり比時に當りて
君七ー 諫言を容ゐバ〳〵をどゝ諫を用ひゐハん
故に此度娘ゞ腹に若君を設けーこと找に於て

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

憂べきの甚しきなり唯今汝に告るものハ汝下
ちてちばらくも諫者に心を許さゝめざる忠心を
励ますべき為なれバ克思惟して勉めよと始終を
細らにものゝたれバ千種之助謹てうけのハり悲ま
さバゝも油断なく父子もろともに舘を守護し
侍りゝる
以上此書の巻編より先の話なり事の来由を
くハしくせんと茲に而こゝを述ぶ以下に至りて

漸く発端の奇説に次と者のべ
海奥有吐黒水疵其身而游者人因黒而渙之と
宜哉秋野稲田左エ門ハ智勇兼備の士として悪漢の
為に蔽ハき此頃君の神おばへぞによろゝバ自ら
御前の出仕も躊ちゝ躊ちゝ二月の末
へうゝ一家中の此者共子息千種之助を始として
衣川御松冨士川等其外五三人ちゝゝして當国
三保の明神へ参詣しけるに関右エ門も同道にて

出行々まバ比日御前に暫時ハ侍人のとゝえすゞーと
稲田左エ門こゝろに歓び今日ハ御前ゑ出て
思の侭に諫め奉らんものをとて頓て館ゑ参り
こゝきど仲国公々別殿にとゝらせのひてもや御酒
女の半と覚ーく例の侍女共高らに唱歌して
吹弾の声喧ーく閑カ者バうこてにもまゝあさ
まーこゝ鼓とのゝうち嘆て獨懐然とーてこち
こゝーゞやゞて別殿に伺公ーてゝと見参に入度
よゝ奏すれバや、ありてめのゝ〳〵ハゞ出来りゝたし
ひらへよとの御諚にてさゝふゝふと云捨つ跡をも
見ずーて走り行さめ稲田左エ門畏りて其侭
ゝこに坐ーこゝるゞ日もすゞぶ脇ざにも動らさず
主君の御出を待居ゝりさきバこの前ゝゝるうする
侍女共の髪に寄りゝーこに集ひて日をひき指を
さーゞどーて笑ふあれバ噛れさーて苦笑るあ
ゝくて稲田左エ門をバ追出ーさきけハひゝりき

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

已に此日も暮にしゞ春の夜なきバセハしゐくそや
三更の空あるに佛国公嘶く稲田左エ門を召れしゞど
朝より酒宴の止時なく熟酔しておハセしゐバのゆふ
ことも志どろにて前後の分ちきなのゝざりゝ稲田
左エ門比有さを見奉りてさらくと涙を流し
ひとすゝに流て曰君ハ志ろしめさきずや往昔角
王の御代にあとりて佞狄と云者酒を造る禹王
飲んでこゝきを甘〳〵としてのゝなハく後世必酒を

もこ国を亡す者なりとんと終に佞狄を疎んじて剖
酒を絶するとやさきバ角王ハ旨酒を悪んで善
詞を好をてふ金言もさふらくバ君もちバしハ飲酒を
止めて臣ゞ諫をもちひなくと詞葉をつくして説ゝと
すきど佛国公さいらへなく夢うつゝにてまどろ
うく時に御前にひろへとる小渡ゞ進く出て稲田
左エ門にいひるハ今宵ハ我ゞ君斯の如く御酒にも
酔りのへるをまどて御機嫌をもそりのハでろる

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

無怨の事をぞ、いひあふぞセー御氣色を損じ
めいぶ御身のさめも悪らるべ、とく〳〵退出ゑと
口も利たいひ散せバ伸国公も目覚ーゑひてそやつ
隨に気遣ひるべし誰ろ何るそや追遣れと左右に
下知をつゝへゑバ、こゑりてさむらひぬとあゑこの
侍女共立上りて上意をきバ速ろに行ゑ罷出ゑと
前後より頻りに促す折こそあき君に奏ー奉度
事ありと高声に呼ゆ〳〵衣川罷平浦松甲斐
富士川流太郎等をそめとして小暗山作石野
八九郎玉枝銀次兵衛荒波音右エ門板ど云へる
阿諛奸佞の曲者共稲田左エ門が嫡子ろ千種之助を
早縄に縛免つ、いさせきと馳走ゞて御前遥に畏り
口を揃へて演々るゑ今日ゆ〳〵ぞ〳〵の御暇を
賜りて三保津姫の明神へ参詣ー浦遣づゝひを下
何の砌彼所に於て一大怪事の出来めれバとく
聴に達ーとく深夜ゑ者ども漸もり上さゞゑと

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

言上に及びけれバ御前を始め一坐の人〻何事やらんと
驚きさわ〻と関右エ門ゲ見えざるを仲国公いと
不審に覚しめして渠ハいうにとのゝバさんざゝふ
関右エ門ゲうくにつ一奇談をさゝやいへとく衣川
嵐平進く出彼所に小蛇の顕きさるをゞめより
関右エ門ゲ雲竜と挑く合て終に其身を引裂ゝ
ま一段な残関右エ門を助けんと竜にむらひて各
男をふるへる有さ多目前に見ちるゲ如くさすゲ

竜の尾に尾をつけて我ハ顔に物語きゲ小度斯と
聞くより也夫ハ実にてさふくふうと忽どうと
泣ふ一て前後不覚に見えそうなきバ君も大ゝ
愁傷しめひせめてゝろうれゲ死骸にても持来れるやと
問ひゆくど八裂に裂きされバ骨さへ微塵に摧け
散て更に形も候ハずと呑ふるにぞ館ハ上下拝並て
奇異の思ひをなしそうなり唯稲田左エ門ハ黙とゝて
心中に思へふく斯神明の暴逆を四討せん事さゝも

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

速あるべしとハ是偏に君が武運の尽ざる所とひさ
有がたく覚へしうど又子息千種之助が縛せられこと
子細も知きゝバ再びうきらが言上に及ぜん事を
まつ所に玉技銀次兵衛口を裂ひて演ろやう其後
竜の海中に身を飜がへして逃失しが不思議や傍の
砂上を見きバ五色の光赫もとる一の宝珠を顕き
えべりゆ是ハ正しく飛竜の腮に蔵しもてる宝
珠にして天下無双の珍宝なるをたゞ偶右兵衛雲に

切落せしよりさこき此所にのがるべしと先取上て
懐に収めつゝ臣等が簡選に及びくるハくる無双の
珍宝を各と分ちとぶんやうもるゝきバ自然よき價を
もとめてくさるべき方へうり渡し其價をもて各と是を
分ちとるべしと已に決定しうど又思廻らせハ
我君元来世の珍器をこのませゝバ他のよき價を待
までもなくとく我君に奉りてうこぞくの恩賞に
預からんと存ぜしより則茲にもて参うさふらふれ

いで高覧に備へんとくぐんの名珠をうやく〳〵しく懐中よりとり出せばなほもいとさに光さ〳〵く普く御殿に輝き渡るが実にせ希代の珠宝なると仲国公ハ賞嘆に堪ぬいず十五城にも易るまじと頼りた懇望〳〵なれば小暗山作すゝ出てさあらバ其連城にあ〳〵ひめひて数ケ所の所領を賜ハらんハいろふぞとひそかにうゞひものすれが何をか望に任ざるべき唯如意宝珠を得させよと心易げに肯ひあくバ思ふつゞよと一同に拝謝〳〵て其侭宝珠を奉れり夫と閑よう稲田左工門苦きさつて言上〳〵けるゆゑも此珠を天下無双の名器とハ申さ々ぬまど国乃為にハ宝とするに足べらず真の宝とするものハ唯善といふ美玉にしてもとより仁義礼智信の五色の光り輝くぞ何ぞ有益の宝とハ申すべきゝ詮なきうつハものを得めふとて多くの所領を寛行ハきんこと夫ハいろなる調きにでさるゝふ巻や

唐土の悪き例を引きあくど彼のよき道をさきまく
ぬハぬ口惜さよそと各もいろあきバ故おき所領を
もとめあふぎ或ハ君の御馬前にていそゞき勲功
ある時ハ又泰平の御代に於ても抜群の忠義の
沙汰に及バずして苟も祢の加増を頂戴せんこと
実に士たるとのく遠慮すべき所にて女臣として
君に物を献ずるにさだろり價をとゝむ可やうも
なしらさぐ不仁の至りなきバ君も弁へぬハでも

うるふまゞ同じくハ比珠を彼この淵に投さてゝ
竜にゝへし茲にハ孔子櫝中なる美玉を求めハん
こきよろべしと忠義一図に瞻しさる気色も無
云ひ尽せど伸國公ハ耳にゞにゝけぬハず先其夏ハ
さし置て千種之助をいゝめさる仔細を聞ゝんと
のゝへバとゝ音右工門ゞ答へて申上るやう渠ゝ
今日ゝしこにおいて頻りに風波の荒きをおそれ
剛絶して倒きしより関右工門ゞ最後の始末も

知ざるきバ、さすけ起〳〵共に帰邑す道すがら
ありしことを咲うるにつけて臆病さよと笑るを
千穂之助ハ聞くよりも以ての外にたゝゞごとく
臆病もの〳〵刀の手の内切るゝ切ぬゝ例し見ると腰なる
刀をぬく手も見せず臣等を目がけて切てかゝるきバ
あまりの事に驚天〳〵とぐむるひゝもあらざるこの
立さハぎとる折こそ折れ迎ひの僕ども松を照して
馳来きバ是さんとうきゝに下知して千穂之助を

なゞめしむるにる狂人のごとくに成りて右往左
往に切まくきバ僕等ゞ疵づく者少なからず半ハ
是に殺されそべりぬ夫と見るより臣等ゞ馳せより
千穂之助のうざしもてる刀をうゝと打落し斯の
如く早縄をもて縛めつ僕等ゞ死骸ハ生さの残る
者共にうさ荷ハセ則舘に罷帰りさふふと変に
演早きバ仲国公も殊更にけしさをうへてのゝやう
ハ正〳〵く狂気せしものとも思へど餘多の下部を

殺害セー段刑罰甚重々きハ其分に差置うこー
後日の沙汰に及ぶまじく稲田左工門に引うこー
閉居を申付べきなりいで狂気セー親子のとのを
引立よといきまさあ〳〵下知ーのくバ暫く御宥免
下さるべー各の訴上にいさう相違あ〳〵ざるや否の
義を一まづ愚息へうづるさくさむらふと稲田左工門
千種之助に忖むうへバ横あひより石野九八郎ぐ押
へぐ〳〵などや我等ぐ訴上セー親をうこづひあふぎ

さーー不審に思さきなバ生のとりく帰こる僕等を
あつめくとひのへ千種之助ハ狂人にくをのづうう
言葉のうへの相違もあるべー只我ぐ君の上意に任セ
怙ー時も早く引立ぬくと堰さつきバ千種之助とく荅て
父ぐ仰をまつまぐもさふらハば面目をふさうくとも
各ー訴上セーに聊違ハぬ始末にく候と其図にく
さきど心のうちにも其物語きるおもむきの皆偽く
我をのく悪さ名にこーうゆきバ速に事実を明て

理非明白に決断せざるおもふといへども もとより
果等が謀計にて我が十分の憤りを引き出し斯く
いまだ狂人と申立る証拠有るまじいろに成こと成
明すとも空しくこれが為に云ひけるまでさらに本
意にハ任ぜざるべし其上過て多くの下人を手にか
けバとても罪科を逃るべしとも思ハれざるまじバ
一先父がもとにうへりて後氏逆臣等を尽く切殺げ
ひとりいさぎよく切腹して今度の罪科を逃んにハ

如べらずと怒びてくろくも巻へるなきまじバ稲田
左衛門も再び問ん詞葉ざにあく歯噛をなして
ひらある所に仲国公いよ〳〵下知して御傍あるべ
引立よとのゝくバ玉枝瀧松不二丸ハ望む所と
すゝ出やがて二人を追立まじバ今ハ力くてハ叶ハじと
舘に思のこしつまらん出れべる技是非なきうくて
鶏明も程近くれバ皆〳〵つゞめて退出せり氏後彼の
名珠をバ室撤におさめゆひて七人のやうにハ望の如く

数ケ所の知行を宛行ハれしとぎ例え

受字第二齣

其比同國府中の野のうさほとりに竹とりの翁と云者ありけり野山にまどりて竹をとりつゝよろづの細工につゝひ〻〻名をバ男右エ門とて我子の生賀もとよりとりとる竹ともろともに連おもバ妻もきるゞゝ友ずりにすきる縁の玉世をて節を守て

おさゝあしのいとむつゆしくぎくらし男右エ門ハ齢已に六十にもなりぬまど子といふものあらざれバ只朝夕に是をのゝ悲とハるしそべりぬ去ゝ折ふるとき例の山に入りて竹を苅るにあるゝを見れバ元の光する竹一竿ありケ多のやしき支におもひて先其竹をゝりて見まバ節の中より丈なりの女子顕ハ出ゝり其うつくしさこと何にとへて云ん

うさぎ〻物翁思ふやゝ我がゝりとりて活計とする

竹の中より産きゝれバ則我が子にありぬべき人をめゝと
やゞ〳〵懐にしつゝ家にうへりて然しのよしをゝ語れバ
妻も大に歓びて愛慈むことゝなし〳〵ゝくて氏
子の名をバなよ竹とゝなん呼てゝり三月ばかり過ぬる
程に氏子ハ能大きに成りて今ハよき程なる姿にぎ
見えゝり〻る年ハ二八ばかりとも覚しく其艶なる
姿又世に有るべしとも思ハれぞ家のうち光ゝちて
夜さへをのづからくゝ慶もあゝざ笑ゝ翁こゝ地

あしく苦しゝ時も氏子を見れぞ病も治し腹立敷
覚もなくなゝさゝ〻るゝ又茲に不思議なるハ氏子を
得てしより此ゝ山に行て竹をうるに一本を荷ひ
来れバ十倍しゝて数竿とゝなゝり其竹を切れバ節乃
中より金も出又銀も出ゝりるあまくゝ斯の如く
なゝれバ今ハ竹の細工をも得せゞ唯金銀をのゝく
よろゞりのことにつゝひゝ〻ゝくゝてゝるバしゝがに歩に
長者ともなゝり〻れバ近あゝりの里人ハ氏翁を指て

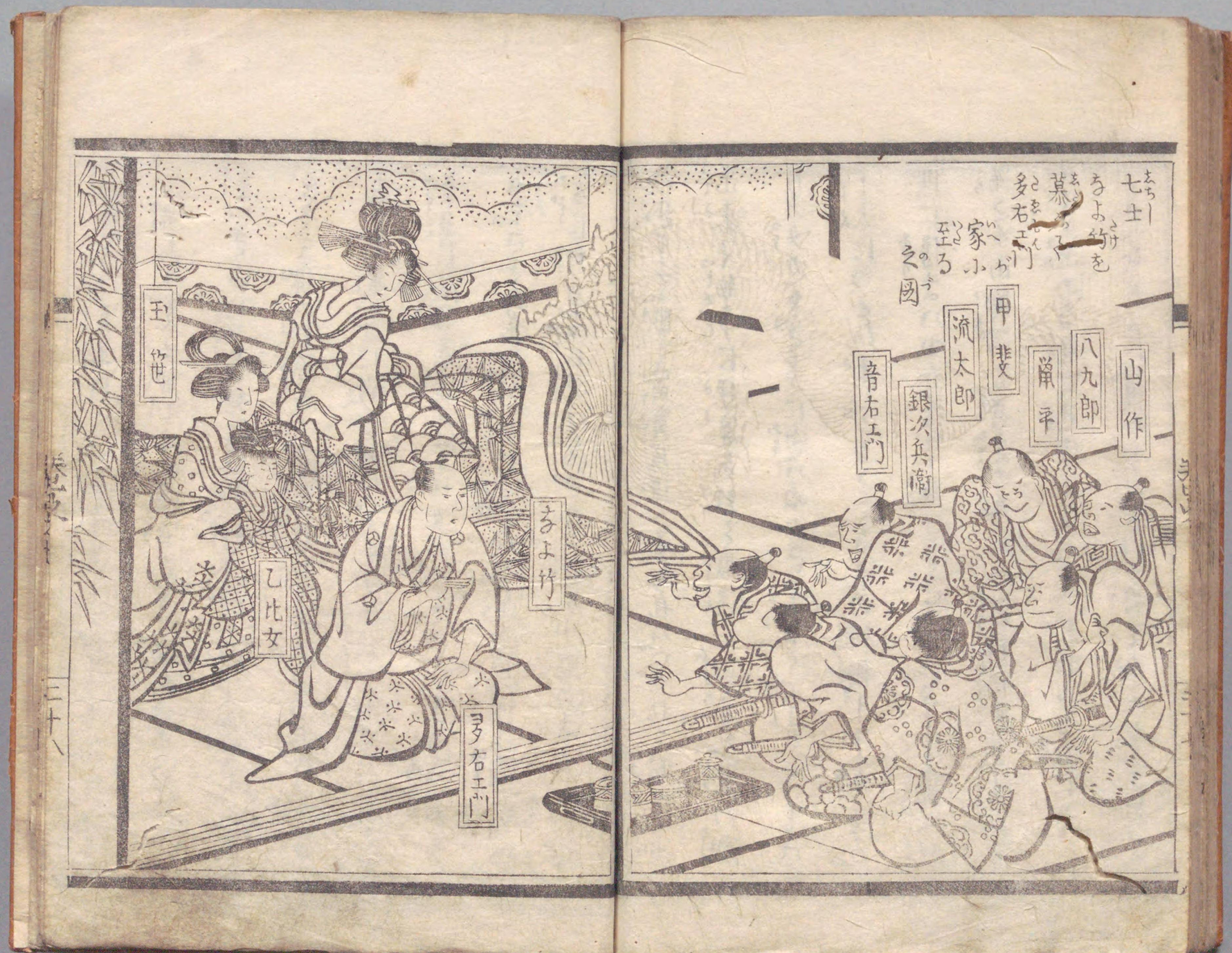
一竹男竹男右エ門と申云ひ名題をうやむ人
多ゐるが割るる竹もやあるとうなと此方のこゝろ
山に行て竹をとるべをのづゝ竹をもてよろ〻ひ
細工をすることの澤山にあり今の世にいたるまでも
彼の翁の餘風をのこして永く當所の名物成
べりぬ夫ハ物おもゝ男右エ門夫婦ハ次第に壯年の
むゝしにゝへりて〻いと若やかにもありとまばいつの程
にか玉笹ハ一人の初子を設けに〻り是も又女兒なり

名をばまよ竹の妹とて〻し此女てふ者に呼びそ〻る
てまよ竹ハ日に脂に美ハしくなり增さるば世界の
おのこあてるもいやしきも只此君を見まほしと
家のあさりをさどひろけば男右エ門もうるさがりて
まよ竹をば深閨の中にひめおきいづくしくゞさ養しが
頻りも弥生のそゞめつゝいづくの空も花見んと群
人の行ふて長閑なる春の日をゞくやさに
過ぐさせんも何とやゝん物憂ゝまばゝ去ばしきこゝろを

るぐさむ為さるべき方の花を見まゝとふと思ひたゝ
ぬる一日妻子を持く平沢といふ所にいさるに茲ハ
花よりも躑躅の餘多咲乱きて数十畳のおゞ地と
紅に染とる如なりくれバ躑躅見にとて遠近より
老若男女の群来ることおさく都にも省まじき
賑るうち時に彼の冨士川流太郎浦松中斐小暗山作
玉枝銀次兵衛荒波音右エ門石野八九郎衣川嵐平を今と
いへる悪黨等ハ此度君より賜ハりし数ケ所の知行地

畝分〳〵て曲て冨貴伝浮くれバいづれも驕る心
出来て物事に伊達を好く風流に出立く花乃朝
月の夕辺もさゝに遊バぬうさへなく今日とても此
平沢につとひ来つゝなることを徘徊して有るゞ
俄に傍まバ西花まぐ輝こゝろとりてさしも濃に咲
満る山躑躅も其光の為に忽紅の色を失ひ皆
尽い〳〵洞める花に彷彿さきバこハ何如なる故に哉と
つゝへをくるに彼の多右エ門ゞ将て来ぬるなよ行なん

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用



国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

立居ふる〻元来四八の相を具して〻さゝも灼々たる
光明あり〻えこ郁とゝろ霊香ありて更に比世の人とも
思はぎるべ咲屋姫てふ神の権に現じめぐるゝ〻さち
ざゝ三保の松原あふぐ〻天津し女の下きるにやと驚く
ぞゝり〻宙歌に妙におぼへく七人の徒ハ物をぞにえ云ず〻
各口に涎沫を流して〻は女の顔をのゝぎ打守居ふる
ゝ〻さふるよ竹ぐ左に歩べバ皆をのづゝ左に向さ〻
右に行バ右に添て〻ぞゝろ花に小鳥のまとふ風情

るを多右エ門ハ夫と見て〻例のうるさくも氣づゝハ
敷もおもふより〻とく家路にゝへるべゝとて又妻
子を浮ゝく府中のゝゝへおもむけバ〻な浅彼の徒も
跡を慕ふゝ影の如くに隨ゝひゝり〻幾里を暦ゝく
多右エ門ハ舍り向近く成り行まバ〻餘多の下部ゝ
是を迎へて〻恙なきを祝ゝよろこびあへり〻物ゝ竹ゝ
後を見きバ〻以前のおのこゝ我を恋きゝくおゝぢく
堂中ふつさそひ入りぬゝくと見るより多右エ門ゝ

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699
ガラス使用

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

之をさ〳〵へて君達ハ何の故にか我が家に来ぬるぞ、
若このあるじに尋ぬる人にてもおハ〳〵まし〳〵
門をや違へぬ〳〵ん何まてもなれ疾帰りぬひとと
外の方おしいどせぎ〳〵る〳〵始免て心づき物ハ
我ひとりの〳〵忍びてこに来りと思ひの外
〳〵きゝもこゝ、ろ〳〵しよりくくハ人のおも
ハく世の様〳〵りもいろ〳〵ん〳〵とさがひに面を
ろく〳〵〳〵るありさまのいとおろ〳〵くもにくら
ちくも見えぬとり〳〵るさきどこのやう〳〵ハいすぐ
定まる数ぞおもひ〳〵ぞりなれぞ唯このお人を
ひゞものにせゐほ〳〵きこゝろゐ〳〵まてハ
人のおもハく世のそ〳〵りをも形へぞやゞてゐる〳〵
言葉を様〳〵へていひゐるハ今日此所に来ることを
全く余の義に〳〵ず平沢おて是なる阿嬢の美美を
見始〳〵より斯く恋ヒの情に堪えず命にうへて慕し
参らする程なれバ譬主ある人にてもおき曲て我ら

方に嫁セ〜めよと一同に喚きのひて寙喧すしき
まぐ〳〵笑えに乃きバ多右エ門ゆ〳〵より大に驚さ〳〵く
一人の娘を七人に嫁セ〜むべききもなし其うへ
いづれをさ〜て壻がゑにとおもふ方もなくざれば
唯誰〳〵にも叶ふまじきよし云んと思ど又あるぢちに
難面ぞりもてなしなバいろなる大事を引出さんと
そゝ〳〵れずとや。とんゝくやと心のうち笑ゞさく志ぞし
いゝへもセざり〜ぬ竹ハ夫と見さ多右エ門う

詣ていへゝ〳〵今殿原のれのあごとすいやしき我ゞ
身をきほどまで思しのハる辱なさに多どろハ児ゞ
なびろざるべき皆我ゞ夫と定めさき君に〜あれば
只御心に任すべきよし肯ひて腸ハきゝ〜と父ゞ
まへに云出きバ忽七人の壯者ハ身も解ぞりに
なりて〳〵いよ〳〵口に涎沫を流し或ハ衣紋を引繕ひ
或ハ鬢のもつきなどゝさなて〳〵我こそ〜渠ゞ夫よ
押合甚〜あひ人先に進〳〵出れバ又なよ竹ゞ云乃る

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

やうゝ尤ハ思ひのハきどもとより浮浪なる心にて誘ふ
君をまゝ〳〵まんべゝとても女房一期の間夫と〳〵定る
人の一人あらでハ叶ハざきバ唯少婦げ為にいのちをも
すてゝのハん程の情あるうさにこゝをびくべゝ何れの
君ゝさこ我〳〵を慈さこてろにてまゝ〳〵まそやゝんと問も
そゝてくぬに我〳〵きハ命をも奉るべきこゝろにて侍るれ
我も君ゝ為あらバ金輪際にもいとゝるべゝまどロヒに
競ふて云へバさあらバ〳〵ハゞ為あらバ世に為難き

事にても為のふべゝ傳字竜の腮に五色の光新なる珠有と
夫を取得て来るゝん人す共ゝ夫に定べゝ〳〵きろハ
是を嵌ゞのふやとゆきバ皆〳〵面を見合て心の内
思ゆゝ幸に彼の玉ハ先に取得て懐にゝ今君ゝ宝蔵の
中にあきバ潜に是を竊得て持来ふんと一人ゝ間に
謀計を廻らセバ皆此悪念発起ゝて各よ竹ゝ望をバ
心安ゝと又一同に肯ひ〳〵物も此七人の壮者等
年月心を同ゝうゝ水奥の交りありゝゝどもよ竹ゝ

色香に迷ふて〳〵彼の宝珠を穿鑿はんの業より今ゝ互に
討果し〳〵己〳〵が素意を遂んと工〳〵ろバ何ろに付て
思セ〳〵〳〵く先多右エ門が舎を我〳〵立出々る
○此より婿八人の趣にいろりてハ書中尽く千変
万化し其賢愚得失の境を分まづく又二巻ゝ
著し候間龍孫戛玉後編と御尋御慰に御求め
清覧あ遊可き下ゝ以上

本所三目徳右衛門町壹丁目
三河屋又兵衛

巻之二終

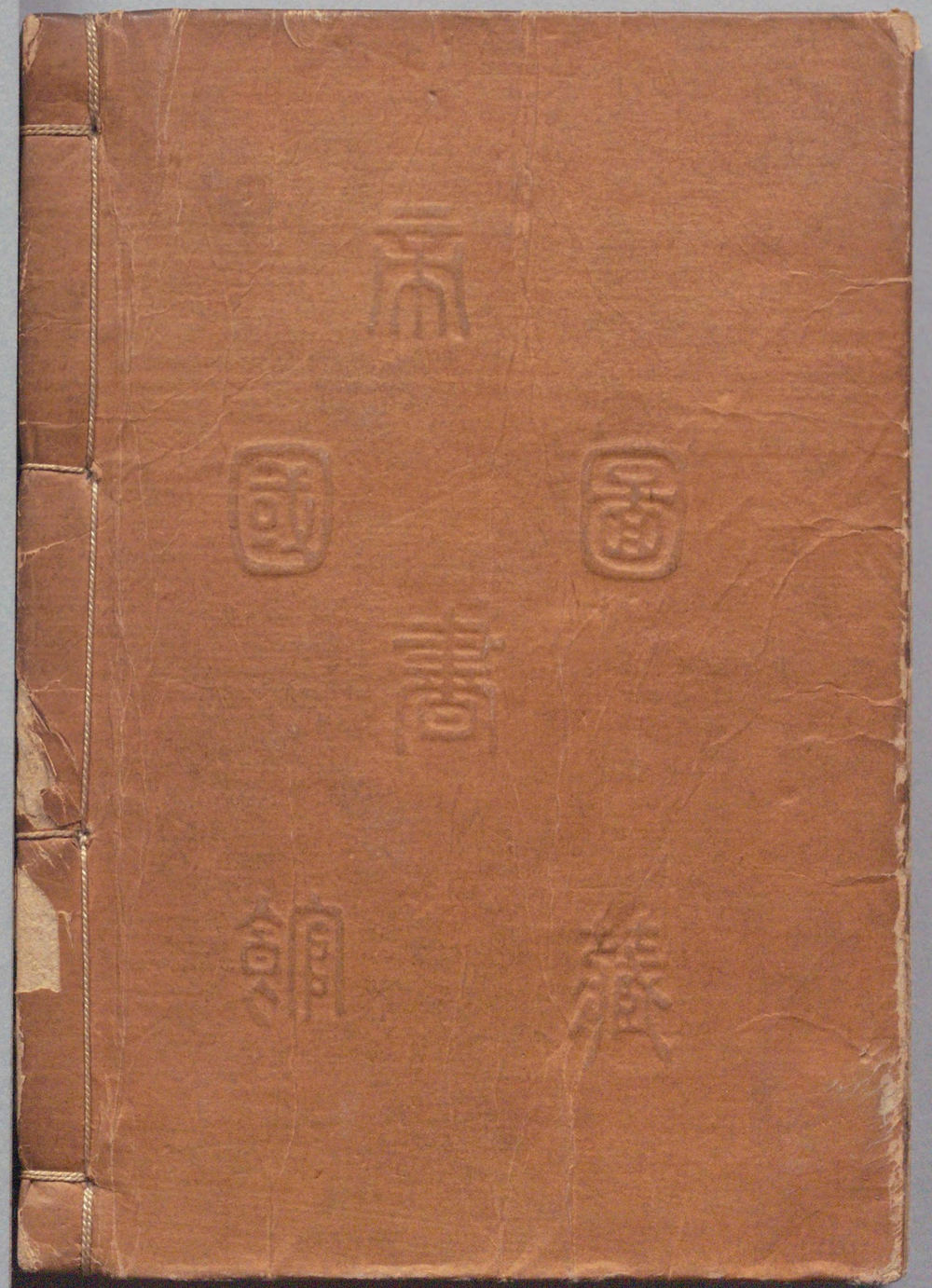
国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用

208
699

国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用



国立国会図書館　龍孫戛玉 2巻　208-699

ガラス使用